

第106回 グローバル・ヒストリーセミナー
Global History Seminar No.106
2022年3月31日（木）

ユーラシア東部のなかの 中華世界の再編

Reformation of the Cinic World in Ancient Eastern Eurasia

荒川 正晴

Masaharu ARAKAWA

1. 中華世界における「大中国」の形成

The formation of “Greater China” in the cinic world

○唐、元、清、中華人民共和国の「大中国」と、



宋、明、中華民國の「小中国」との相互転換

「大中国」の嚆矢となる唐帝国の形成をどのように捉えるか？

→ 4世紀初め（五胡十六国・東晋）～7世紀（唐帝国の成立）における中華世界の再編をユーラシア東部の広域空間のなかで捉える。

※ 「ユーラシア（大陸）東部」という空間設定は、妹尾達彦「中華の分裂と再生」『岩波講座 世界歴史 9 中華の分裂と再生』1999年、pp.8-14.から始まる。

⇒ 詳しくは、妹尾達彦「空間の分類－ユーラシア大陸東部・中央部・西部という空間設定の提唱－」の第1節と第2節（同『グローバル・ヒストリー』中央大学出版部、2018年、45-61頁）で展開。

妹尾によるユーラシア東部の空間設定 Spatial Setting of Eastern Eurasia by Prof. Seo

(妹尾2018、29頁より引用)



図 12 アフロ・ユーラシア大陸の環境と前近代の3つの世界システム

アフロ・ユーラシア大陸の主な政権拠点地

—前1000年紀～16世紀—

2. 妹尾以降のユーラシア東部の議論

Discussions on Eastern Eurasia after Seo1999

- ユーラシア東部（東方）/東部（東方）ユーラシア論
※古畑2022による整理（「東(部)ユーラシア史という考え方」同編著『高句麗・渤海史の射程－古代東北アジア史研究の新動向－』汲古書院, 2022.）
- 上田信2005（14~19世紀の明清期の中国を理解するうえで有効な広域的枠組みとして「**東ユーラシア**」を提唱）。※同「東ユーラシア圏域の史的展開」『岩波講座 世界歴史 12 東アジアと東南アジアの近世 15~18世紀』2022年。
- **中央ユーラシア史の系譜** ※森部豊2010:2019・古松崇志2011:2019など
「**中国史**をユーラシアとのつながりの視点から広やかにとらえてゆくことを可能にするための地域概念」「おおよそ**パミール以東の空間**、中国本土・朝鮮半島・マンチュリア・東シベリア・モンゴリア・河西回廊、東トルキスタン・チベット・雲南・インドシナ半島などの広がり」（古松2011）
- **「東アジア世界」論批判の系譜**
日本古代史研究者による、「東アジア世界」論の限界性とそれに代わる概念としての「東(部)ユーラシア(世界)」の提示 ※廣瀬憲雄2010:2018:2019、山内晋次2011、鈴木靖民2014など
⇒廣瀬・山内の「東(部)ユーラシア」は北アジアや中央アジア地域に加えて、日本や海域世界を取り込んだ広域空間を設定。ただし堀敏一が改めて提唱した拡大版「東アジア世界」（堀1993）と陸上部分は空間的にはほぼ重なる。
鈴木の「東部ユーラシア世界」論は、「中心-周辺-亜周辺」理論を援用し、空間的に遠く西アジア世界まで包含するのが特徴。ただしその広がりには南朝、梁と朝貢関係を有する諸国の範囲。

引用参考文献 Citing References

- 上田信『中国の歴史09 海と帝国:明清時代』講談社、2005年。
- 鈴木靖民「東部ユーラシア世界史と東アジア世界史ー梁の国際関係・国際秩序・国際意識を中心としてー」同・金子修一編『梁職貢図と東部ユーラシア世界』勉誠出版、2014年。
- 廣瀬憲雄「倭国・日本史と東部ユーラシアー6~13世紀における政治的連関再考」『歴史学研究』872、2010年。
同『古代日本と東部ユーラシアの国際関係』勉誠出版、2018年。
同「日本史からの東部ユーラシア(世界)論」『唐代史研究』23、2019年。
- 古松崇志「10~13世紀多国並存時代のユーラシア(Eurasia)東方における国際関係」『中国史学』21、2011年。
同「10~12世紀ユーラシア東方における「多国体制」再考」『唐代史研究』23、2019年。
- 堀敏一『中国と古代東アジア世界ー中華的世界と諸民族ー』岩波書店、1993年。
- 森部豊『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』関西大学出版部、2010年。
同「中国「中古史」研究と「東ユーラシア世界」」『唐代史研究』23、2019年。

3. 中華世界の再編（4~8世紀）を検討するための 新たな空間設定 New spatial setting for examining the reformation of the Cinic world(4th-8th centuries)

○これまでのユーラシア東部（東方）論の死角

- ・ ユーラシア東部・西部の境域地帯

= ユーラシア東部地域と（アフロ・）ユーラシア西部地域が
重なる **境域地帯**（パミール以西の西トルキスタン~アフガニ
スタン~西北インドにわたる地帯）の存在



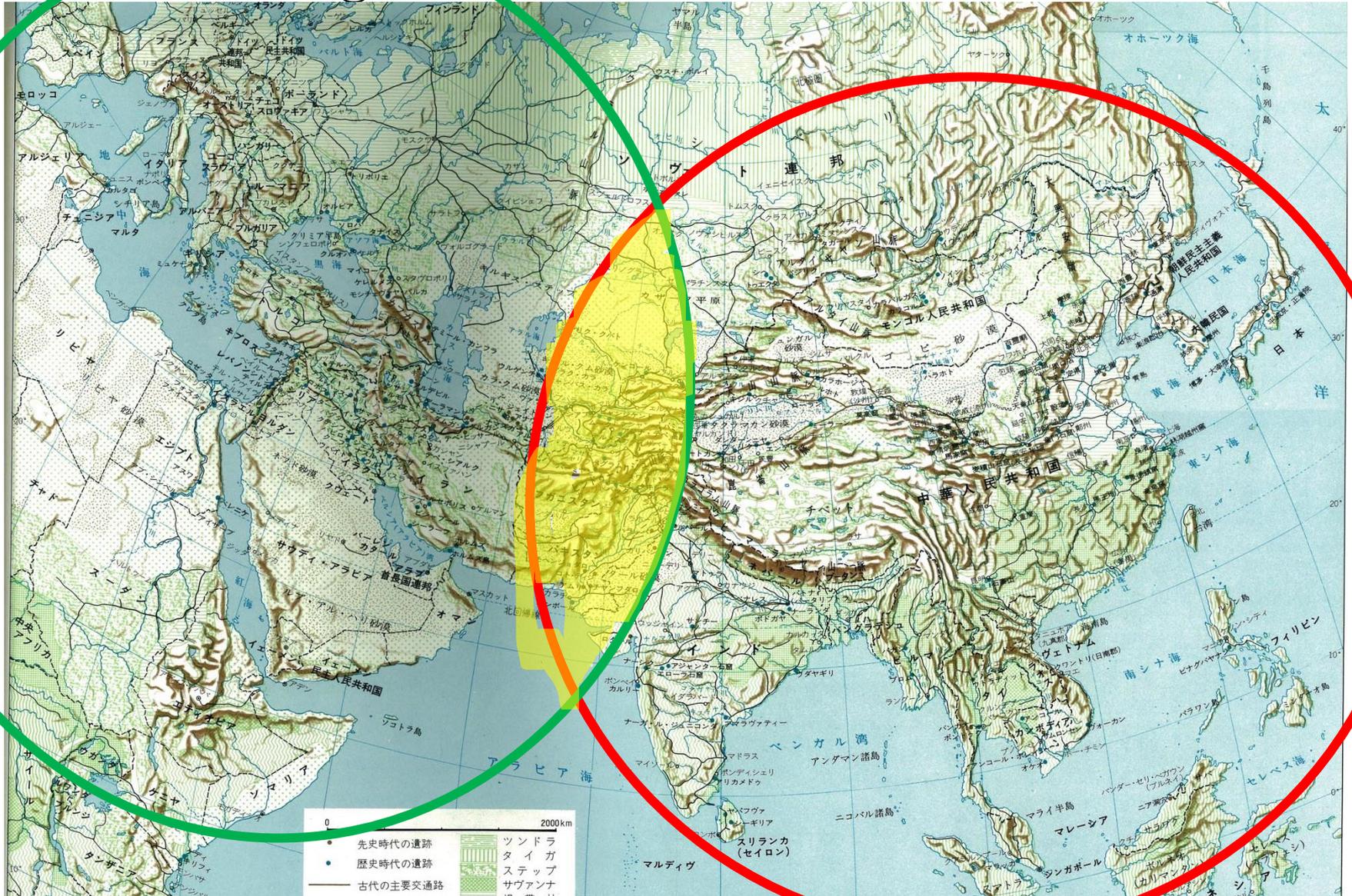
- ・ 華北に都を定めて中華を確保しようとした北魏~隋唐政権に
とって、**境域地帯**の動向は常に注視の的。当該期における中
華世界再編の動きと密接に関与。



前漢期、張騫の大月氏派遣を契機にした西域支配の開始と、
境域地帯と中華世界との密接な政治・経済関係の構築

（cf. 荒川「漢晋期の中央アジアと中華世界」『岩波講座 世界歴史05 中華世界の盛衰 ~四世紀』岩
波書店、2021年）

ユーラシア中央部に広がる境域地帯 the border region that stretches across central Eurasia.



4.ユーラシア東西部の境域地帯と中華世界の再編

(1)境域地帯のフン系・トルコ系遊牧勢力

Hun and Turkic nomadic groups in the border zone

○中華世界の再編期（4~8世紀）に出現した境域地帯の広域国家

キダ（一）ラと**エフタル**(領域図参照)

→日本の東洋史学においては、エフタルの民族系統に議論が集中 イラン系か否か

• 近年のF. GrenetとE. de la Vaissièreの貢献

F. Grenet, 'Crise et sortie de crise en Bacriane-Sogdiane aux IVe-Ve siècle', in: *La Persia e l'Asia centrale da Alessandro al X secolo*. Atti dei convegni Lincei, 127, Rome, 1996, pp. 367-390.

—— 'Regional interaction in Central Asia and Northwest India in the Kidarite and Hephthalite periods', in: N. Sims-Williams (ed.), *Indo-Iranian languages and peoples*, New York/Oxford, 2002, pp. 203-224.

E. de la Vaissière, *Histoire des marchands sogdiens*, Paris, 2002; 2nd ed. 2004; 3rd ed. 2016. (影山悦子による日本語訳『ソグド商人の歴史』岩波2019は第2版に基づく)

—— 'Is there a "Nationality" of the Hephthalites?', *Bulletin of the Asia Institute* 17, 2003 [2007], pp. 119-132.

—— 'The steppe world and the rise of the Huns', in: M. Maas (ed.), *The Cambridge companion to the Age of Attila*, New York, 2015, pp. 175-191.

吉田豊「ソグド人とソグドの歴史」（曾布川／吉田（編）『ソグド人の美術と言語』臨川書店, 2011, pp. 7-78）「第二章 ソグド本土の歴史 中央アジア史の一場面の「2 キダーラとエフタル」（pp. 22-25）

稲葉穰『イスラームの東・中華の西 7~8世紀の中央アジアを巡って』（京大人文研東方学叢書13）臨川書店, 2022年.

4~8世紀におけるトハーリスタンを中心とした 境域地帯の政治動向 Political trends in the border zone centered on Tokharistan in the 4th~8th centuries.

○中央ユーラシアの遊牧国家である匈奴（Hun）の分裂と移動

⇒ **4世紀半ば**に、Hunの遊牧部族がアルタイ方面から境域地帯へ侵入

→ キダ（一）ラヤエフタル

・キダ（一）ラの支配（**4世紀半ば頃**）

・エフタルの勃興と広域支配（**5世紀頃**） 「エフタルの平和」

456年には北魏（文成帝）へ使節を派遣

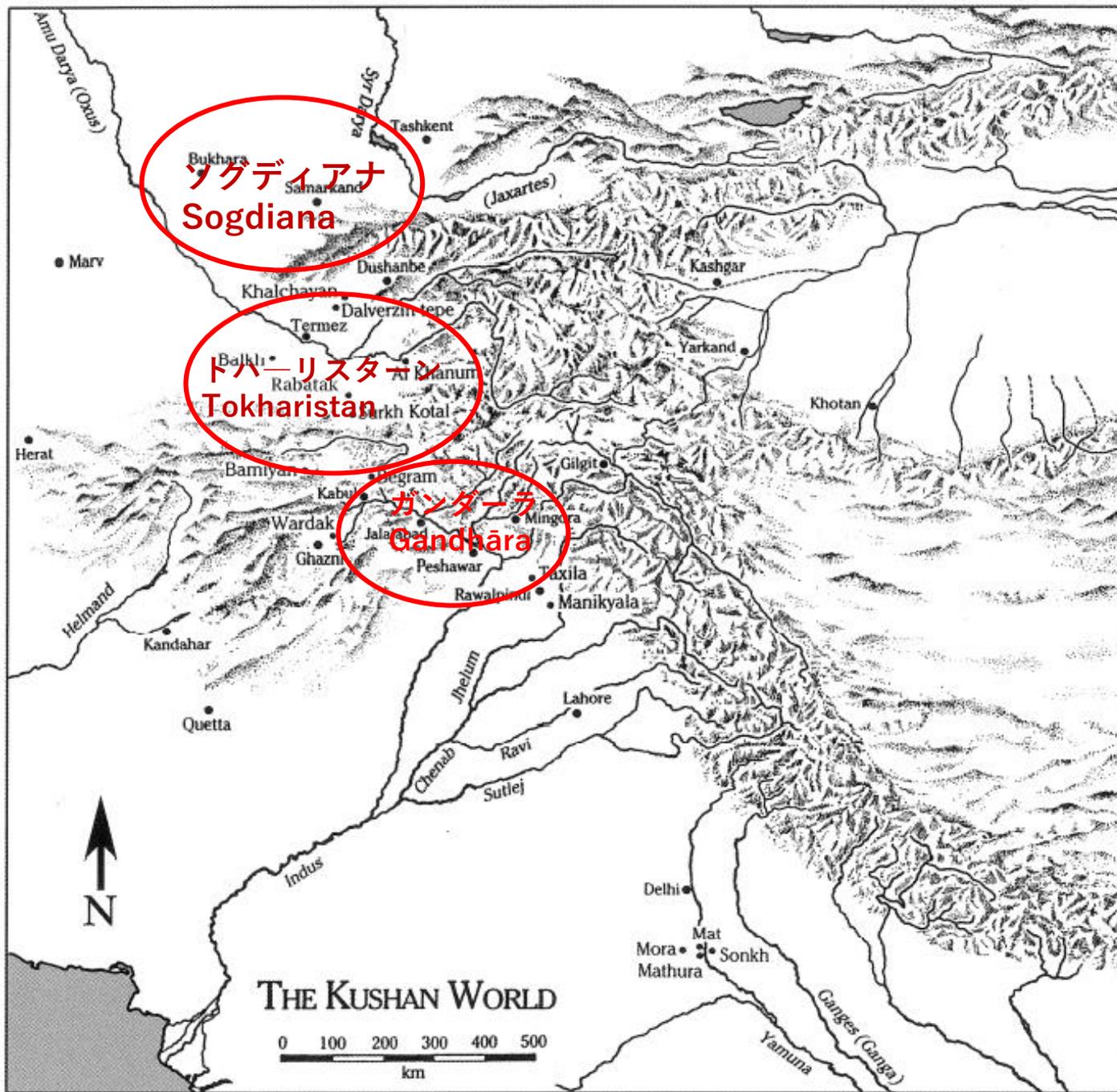
⇒ **4世紀半ば**に、Hunとともに**トルコ系**遊牧部族も移動。

後の**ハラジュ突厥**（稲葉穰2004）（同「アフガニスタンにおけるハラジュの王国」『東方学報』76, 2004, pp. 313-382.）

⇒ 6世紀半ばの**突厥による広域国家**の成立

→ **西突厥**のトハーリスタン進出・支配

⇒ 7世紀における**ハラジュ突厥**・**奚素突厥**などのトルコ系遊牧勢力
およびHunの残存勢力のトハーリスタン割拠



7世紀におけるトルコ系・フン系遊牧勢力のトハーリスタン割拠
The Turkish-Hunnic Nomadic Occupation of Tokharistan in the 7th C.E.



地図3 十六都督府の所在地

(2) エフタル勢力拡大期における北魏の洛陽遷都

The Northern Wei capital moved to Luoyang during the Hephthalite expansion period

①中華世界再編の最終段階としての隋唐帝国の形成

⇒形成の起点は北魏の洛陽への遷都（494年）

何故、孝文帝はこのタイミングで洛陽遷都に踏み切ったか？

※佐川2018・・・柔然の北辺からの脅威の解消

六鎮方面における高車部族の配置

(佐川英治2018「北魏道武帝の「部族解散」と高車部族に対する羈縻支配」宮宅潔編『他民族社会の軍事統治』京都大学出版会)

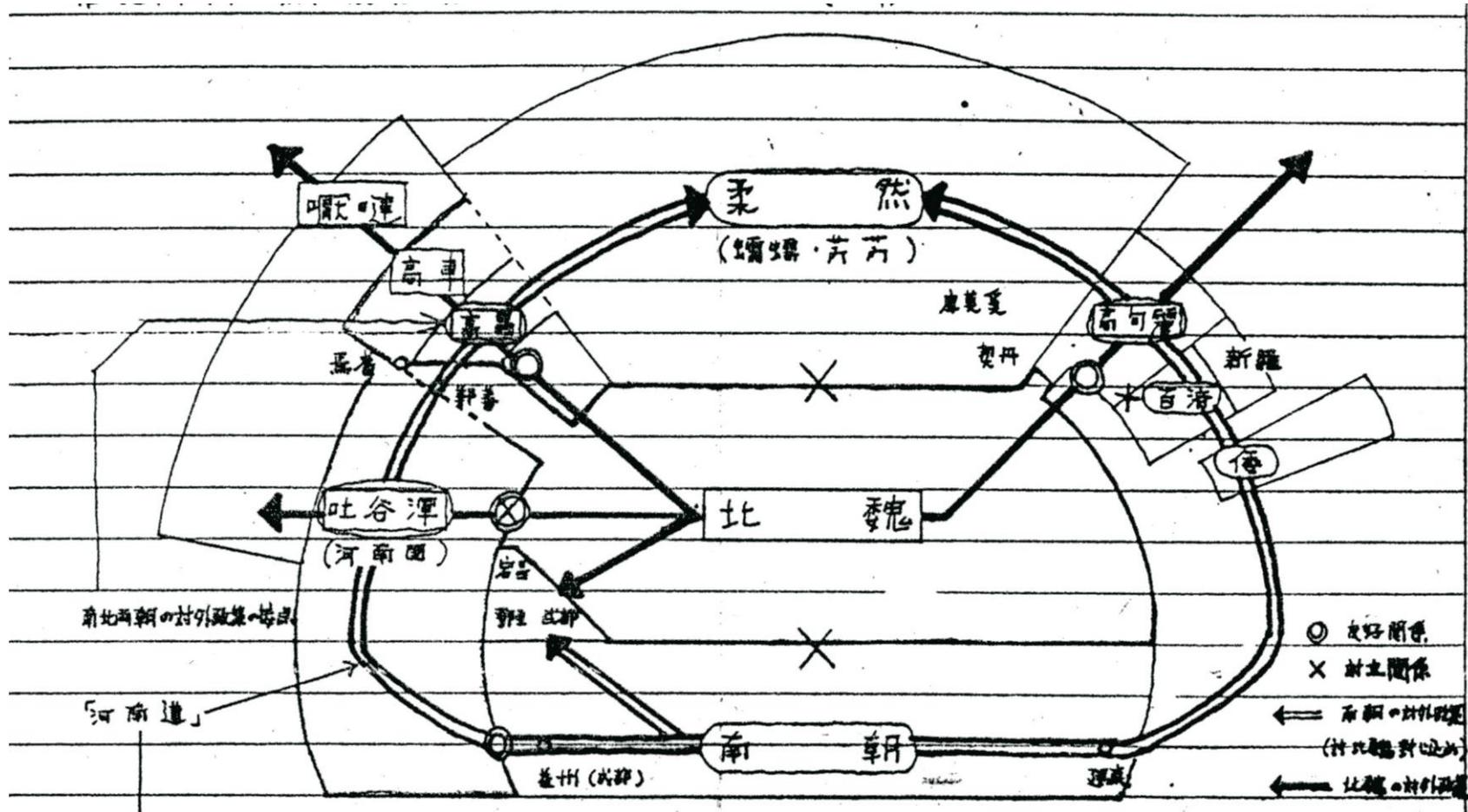


ただし柔然の脅威の本質は、柔然が南朝と通じるとともに、西の新興国エフタルや吐谷渾、東の朝鮮半島の諸国らと連携し、**北魏を完全に囲い込む体制を構築**するその動きにあり。

⇒ただし、東方については、5世紀中葉の段階で北魏が高句麗を抱き込むことに成功し、その一角を突き崩す。

白須浄真氏による作図

Drawing by Prof. Shirasu



孝文帝期における包囲網を打破する対外政策の重要ポイント Key points of foreign policy to break the siege during the Xiaowen Emperor's reign

○柔然が構築する北魏包囲網による北魏への圧力を打破し、洛陽へ遷都するための良好な政治状況を作るための北魏の対外政策の重要ポイント ⇒トゥルファンの掌握

- ・柔然の中央アジア統治および吐谷渾・南朝・インド諸国との外交の重要拠点
= **トゥルファン** → トゥルファン文書(「闕氏高昌国永寧9・10年(474・475)送使出人・出馬条記文書」97TSYM1:13-4,5v)の分析に基づく
南朝の宋(呉客)および中央アジアの国家(焉耆Karashahr・子合国Karghalik)、西北インド(烏菴Uddiyāna)、インド(婆羅門)など諸国の使節を高昌国が送迎

柔然とエフタル、吐谷渾との連携ポイントとしてのトゥルファン・オアシス



※北魏宣武帝が高車王の弥俄突に下した詔

「蠕蠕(柔然)・嚙噠(エフタル)・吐谷渾が往来するにあたっては、**路はすべて高昌国(トゥルファン)を經由している**。今回、高昌国が北魏に内附したので、柔然が吐谷渾へ通ずる道はたたれた。よって高車王の弥俄突は高昌国と共に警戒して、柔然が高昌国を侵さないようにさせよ」(『通典』卷一九七高車伝ほか)

柔然と境域地帯の新興大国である**エフタル**とが結びつくことを強く警戒

洛陽遷都前における、トウルフアンをめぐる遊牧勢力の攻防

The attack and defense of nomadic states over Turfan before the relocation of the capital to Luoyang

○柔然の支配期（450頃~487年）

トウルフアンの沮渠氏高昌国（450-460年）・鬬氏高昌国（460~491年）

○高車(トルコ系遊牧勢力)の支配期

487年の柔然支配下にあったトルコ系遊牧国家の高車の反乱・自立

→高車によるトウルフアンの支配（鬬氏・張氏・馬氏高昌国）



北魏へ使節を派遣

490年、ソグド商人の越者Warčを北魏へ。北魏、高車と提携関係を構築

→トウルフアンを掌握し、柔然とエフタル・吐谷渾との連携を阻止。

（洛陽遷都後）

○柔然・高車の抗争が再燃するなか、北魏は麴氏高昌国と冊封関係を構築

高昌国の国家体制の整備



突厥の勃興と麴氏高昌国への軍事侵攻

高昌国と西突厥国家との関係の親密化(高昌王に対してiltäbärを授与)

(3) 唐帝国による都護府の設置と蕃漢体制の整備 Establishment of the Protectorate and the “Non Han-Han system” by the Tang Empire

○唐とトルコ遊牧勢力(突厥)との不断なる抗争・交渉・取り込み



唐帝国による突厥第一帝国の征服活動

・太宗の東突厥の征服と諸部族の服属

⇒ 燕然都護府(647年) → 瀚海都護府・雲中都護府(単于都護府)(663年) → 安北都護府(669年)

→ 服属してきた諸部族を都督府・州に組み込む

・高宗の西突厥の征服と諸部族の服属

⇒ 濛池都護府(657年)・崑陵都護府(657年)

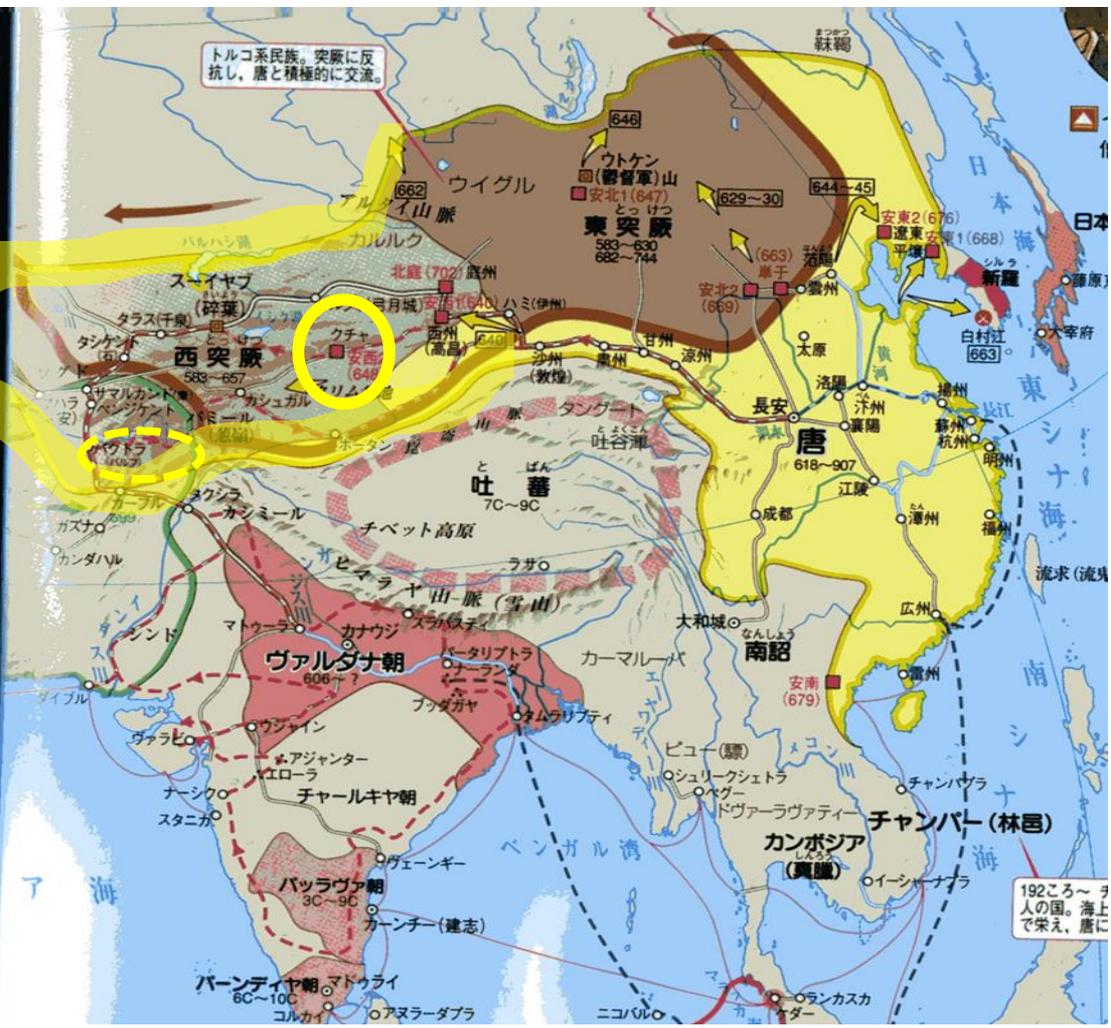
安西都護府(651年) → 服属諸部族の都督府・州への組込み

→ トハーリスターンの支配と「西域十六府州の設置」

唐安西都護府「西域十六府州」とフン・トルコ系諸勢力



地図3 十六都督府の所在地



(4)都護府管下の駅(貢)道敷設 Construction of post (tributary) roads under the jurisdiction of the Protectorate

- 都護府管下の蕃都督府・蕃州
燕然・安北・単于・安西・北庭・安東・安南都護府
- 唐帝国の駅道の敷設

各府州と帝都(長安)が、駅道により直結する交通体制

外地の都護府も同一の体制

⇒ 燕然都護府の「参天可汗道」、安西・北庭都護府の駅館道
帝都の長安と直結する「**漢道**」

唐の駅館運営と蕃府-州-部落の百姓・首領

○蕃府州首領と皇帝との支配-従属関係の構築

- ・ 毎年、蕃府州の都督・刺史を担う首領により、駅館を場として貢獻物を皇帝に上納 ← 「駅賜」（絹帛）の賜与



各首領が皇帝個人に上納する「進奉」に相当

○蕃府州民（百姓）の労役供出

- ・ 駅館の維持と交通役（馬畜や使者の送迎）

(5) 財政面から見た中華世界の再編

Reformation the Cinic World from a Financial Perspective

(1) 唐帝国の国家財政

①唐の国家財政 [年間] の規模

[8世紀の天宝期]

穀物 2500余万石

布絹綿 2500余万端屯疋 ⇒

銭 200余万貫

1100万 [入西京<長安>]

100万 [入東京<洛陽>]

1300万 [諸道兵賜及和糴、遠小州使充
官料郵駅等費]



※布絹綿**1300万**の内訳

①河西節度使(180万)・伊西北庭節度使(48万)・安西節度使(62万)・隴右節度使(250万)

②朔方節度使 (200万) ・河東節度使 (130万)

③范陽節度使 (80万) ・平盧節度使 (0として計算)

④劍南節度使 (80万)

⑤群牧使 (60万)

⑥遠小州の官料・郵駅等費 (210万) ⇒ 「首領」層への「駅賜」

毎年、軍事費だけでも540万の絹綿を河西・中央アジア方面へ輸送 (全軍事費の約50%)

流通する商品貨幣としての絹帛

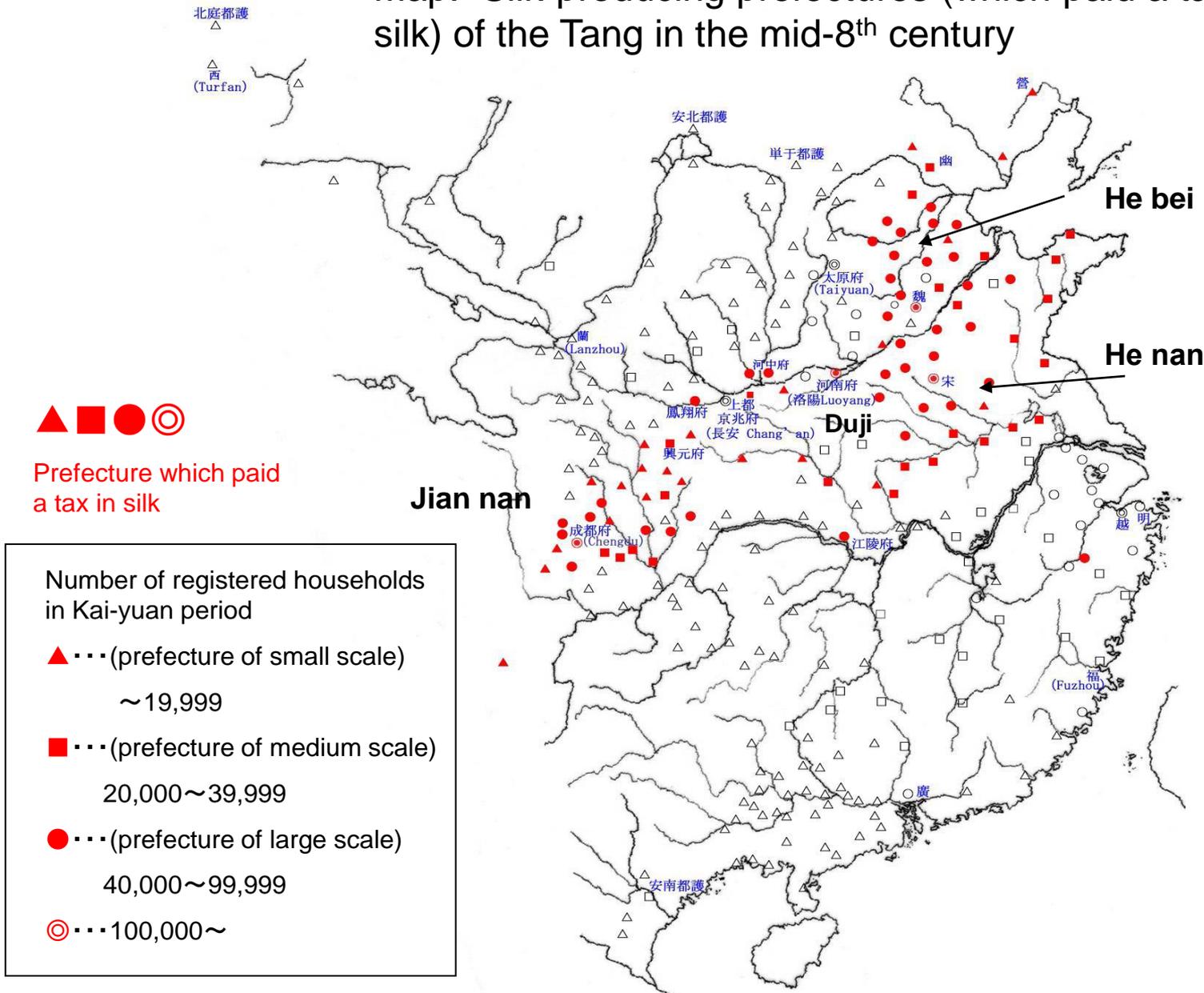
Woven silk as commodity money

(一疋と半疋物、大は50cmほどの長さ)

大英博物館所蔵 (スタイン将来)

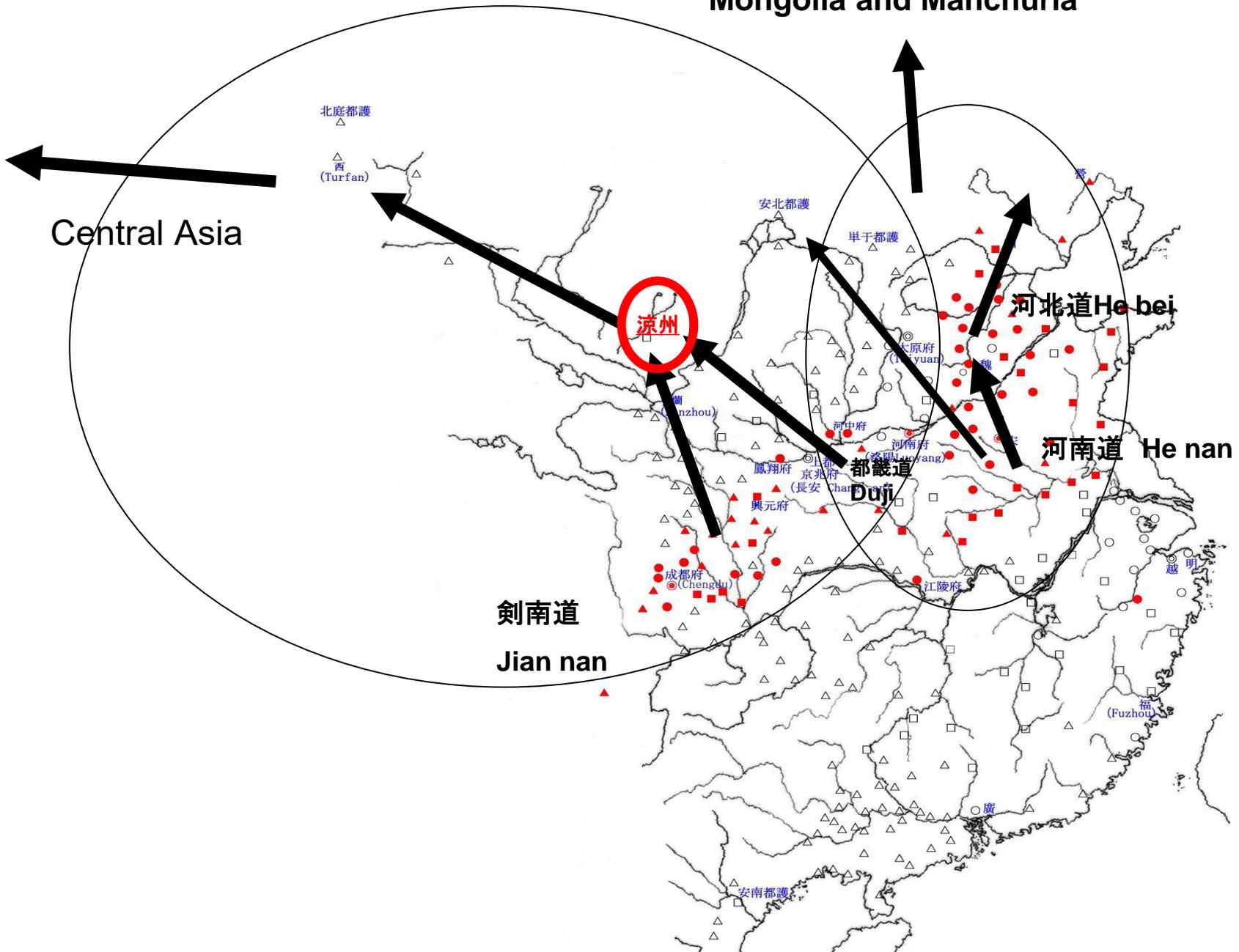


Map: Silk-producing prefectures (which paid a tax in silk) of the Tang in the mid-8th century



Mongolia and Manchuria

Central Asia



涼州

河北道 He bei

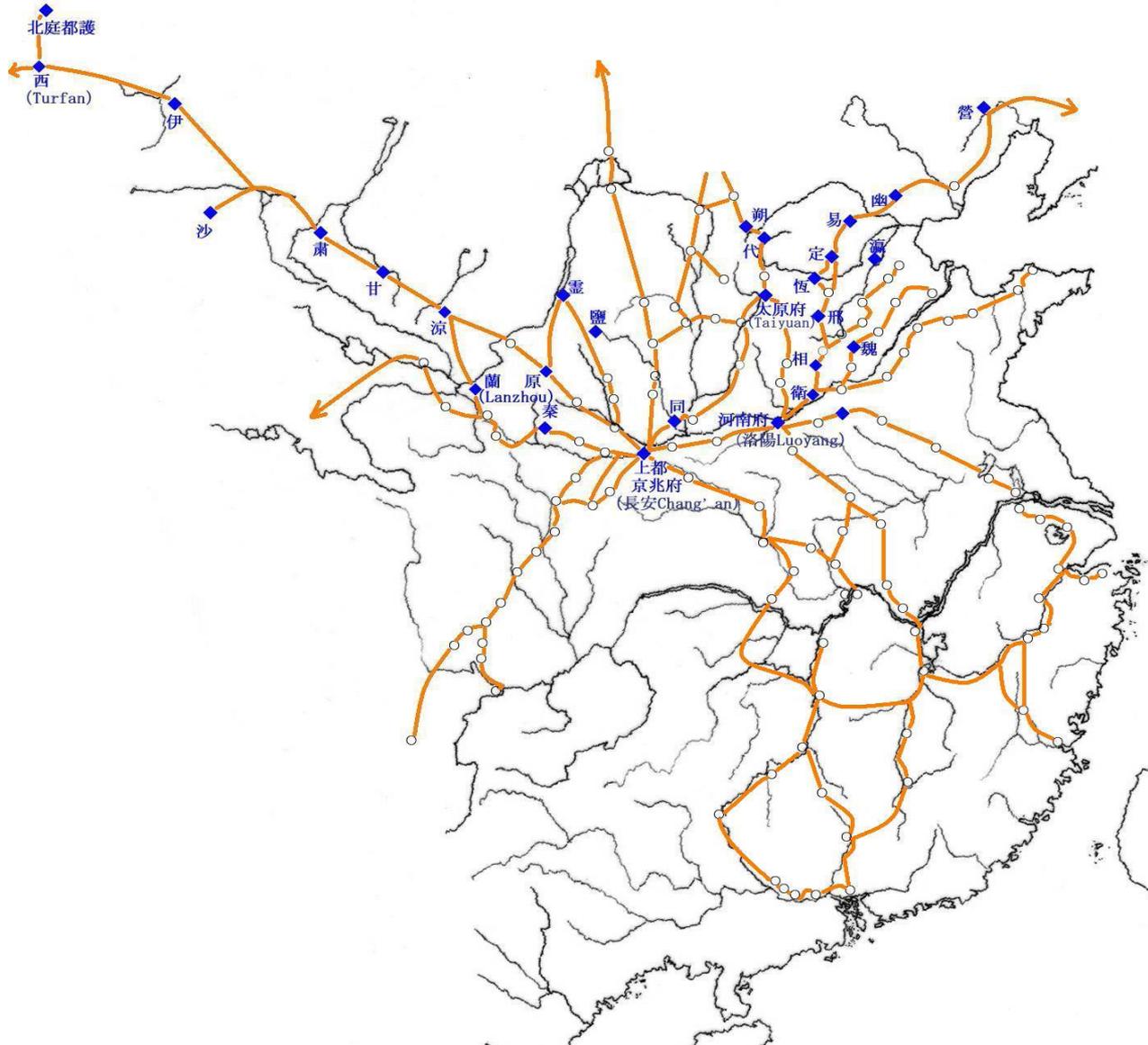
河南道 He nan

都畿道 Du ji

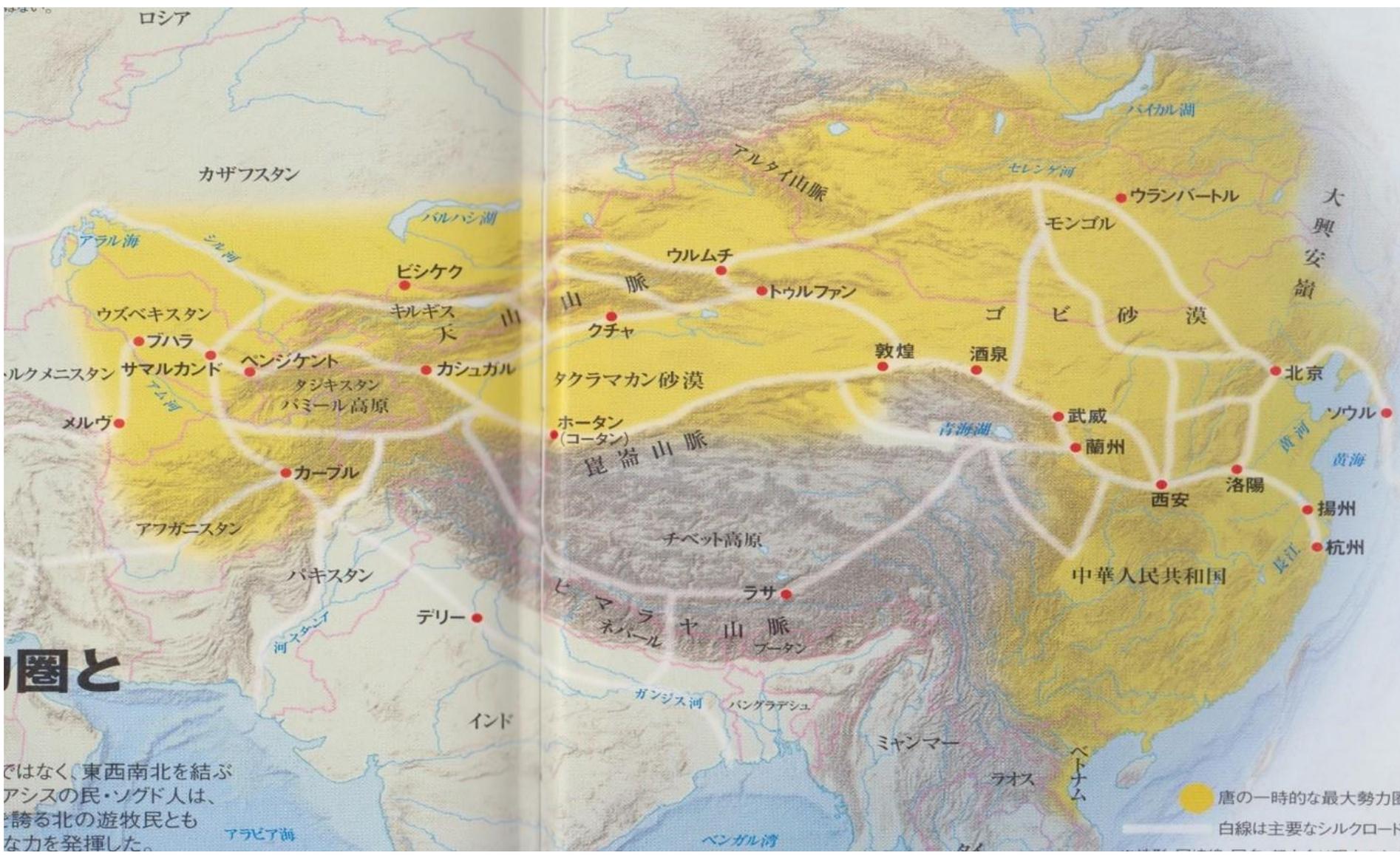
劍南道 Jian nan

駅道とソグド人コロニー図(絹帛の生産地との重なりに注意)

Post roads and Sogdian colonies map (note the overlap with the silk production area)



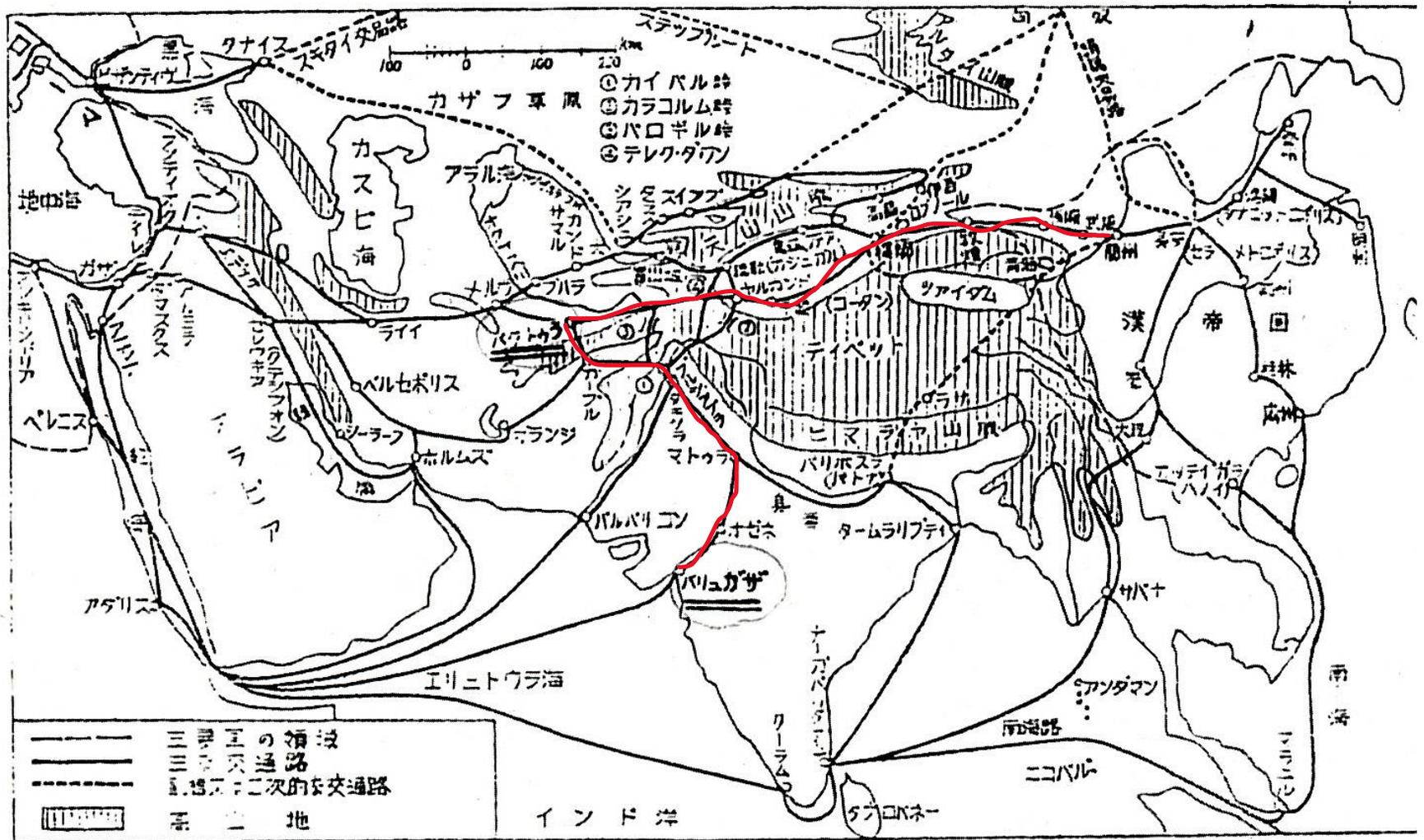
絹帛（帛練）経済圏の広がり Expansion of the economic sphere in which silk fabrics are distributed



(5) 境域地帯の商人と中華世界の再編 Traders in the Border zone and the Reformation of the Cinic World

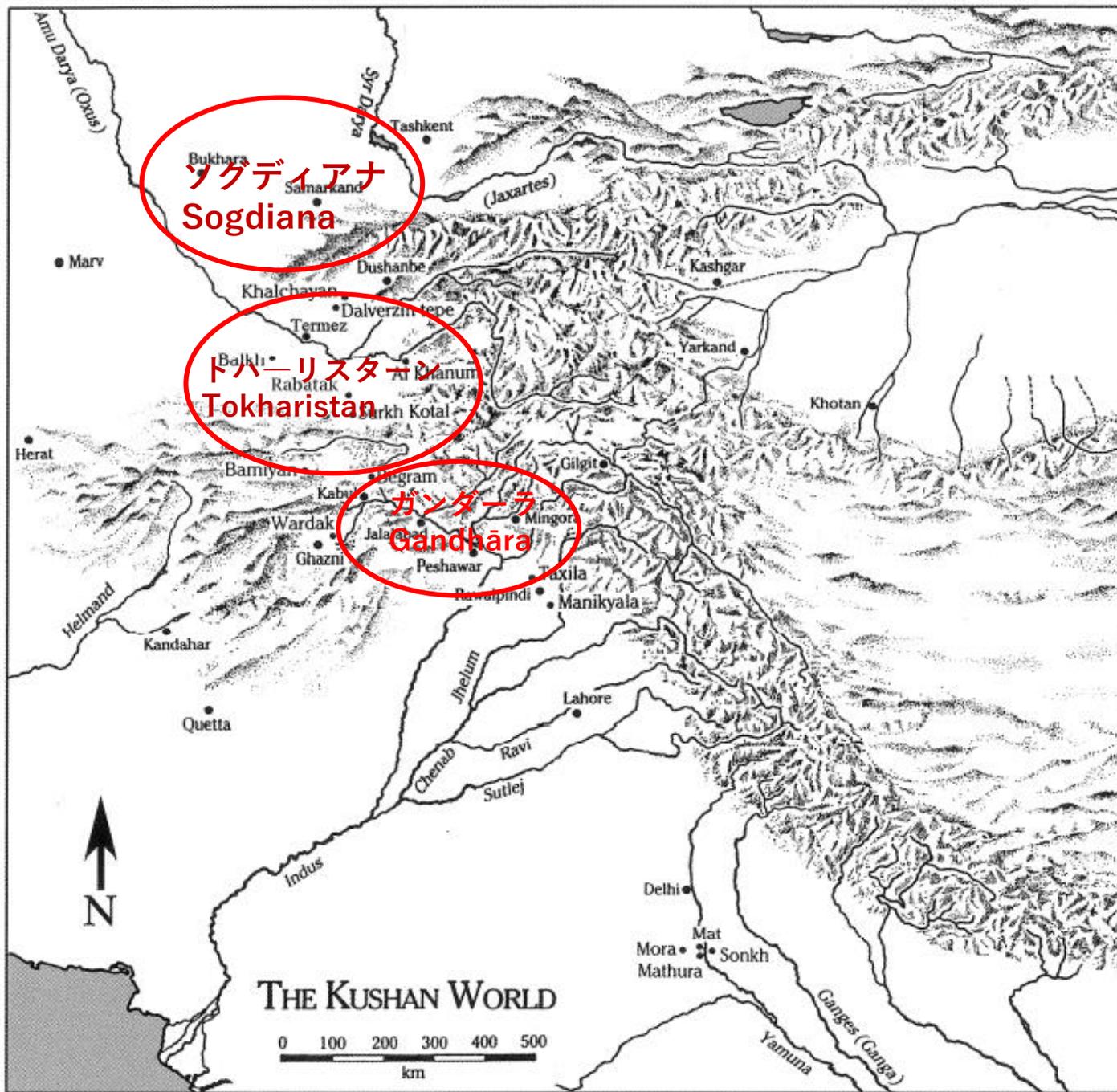
- 本境域地帯に走る交易ルート^①を、中央ユーラシアの陸域を走る草原ルートおよびオアシスルートと、海域を走るインド・東南アジアの海上ルートを結ぶ南北線^②と見る。
⇒本境域地帯の商人（ソグディアナやトハーリスターンおよびガンダーラ〔西北インド〕出身）は、陸上ルートだけでなく、海上ルートでの交易活動とも密接に関与。
※トハーリスターン・ガンダーラ（罽賓）周辺域は、陸上および海上交易活動が結びつく場として機能

※『エリュトラ海案内記』（Periplus maris Erythraei）
 （1世紀の後半（60～70）に成立、エジプト出身の航海者の作）



Thīnai, This, Sīnai China 説

Seres (Σήρες) Serica 「罽条 = 絲 説」



唐帝国支配下のソグド商人 Sogdian traders under the rule of the Tang Empire

- 唐帝国の内地(漢地)府州県・・・百姓、行客、興胡に編籍
百姓…本貫州の戸籍に付けられたソグド人
行客…本貫州から離れ現住州の戸籍に付けられた客籍ソグド人
興胡…外来のソグド人（テュルク系・トハーリスタン系・インド系ソグド人を含む）

「漢地の興胡」として境域地帯において活動



慧超『往五天竺国伝』（720~727年前後）（P.3532文書）

「さらに迦葉弥羅国の西北、山の向こうへ一ヶ月行程行き、建駄羅（Gandhāra）につく。ここの王も軍もおしなべて突厥である。（中略）漢地の興胡は、（4~5文字分の缺）廻して立ち寄らない。南に行くと道は険阻で追剥が多い。」

桑山正進編『慧超往五天竺國伝研究』京都大学人文科学研究所、1992年、38頁。

ソグド商人が扱った交易品 The trading goods handled by the Sogdian traders

- (a) 貴金属[金・銀・銅 etc.]
- (b) 貴石類[ラピスラズリ・トルコ石・玉 etc.]
- (c) 絹製品[絹糸・絹織物]
- (d) 香薬類[麝香・沈香・白檀・鬱金根(ターメリック)・硃沙etc.]
- (e) 人[奴婢]、畜[馬・駱駝・牛etc.]

「漢地の興胡」にとっての高額取引商品

High-end products for "Xing Hu" in the Tang

○香薬類(市場における取引価格順)

1. **麝香** 1分(0.14g) 40~33文
2. **沈香** 1分(0.14g) 22~17文
3. **白檀** 1分(0.14g) 15~11文

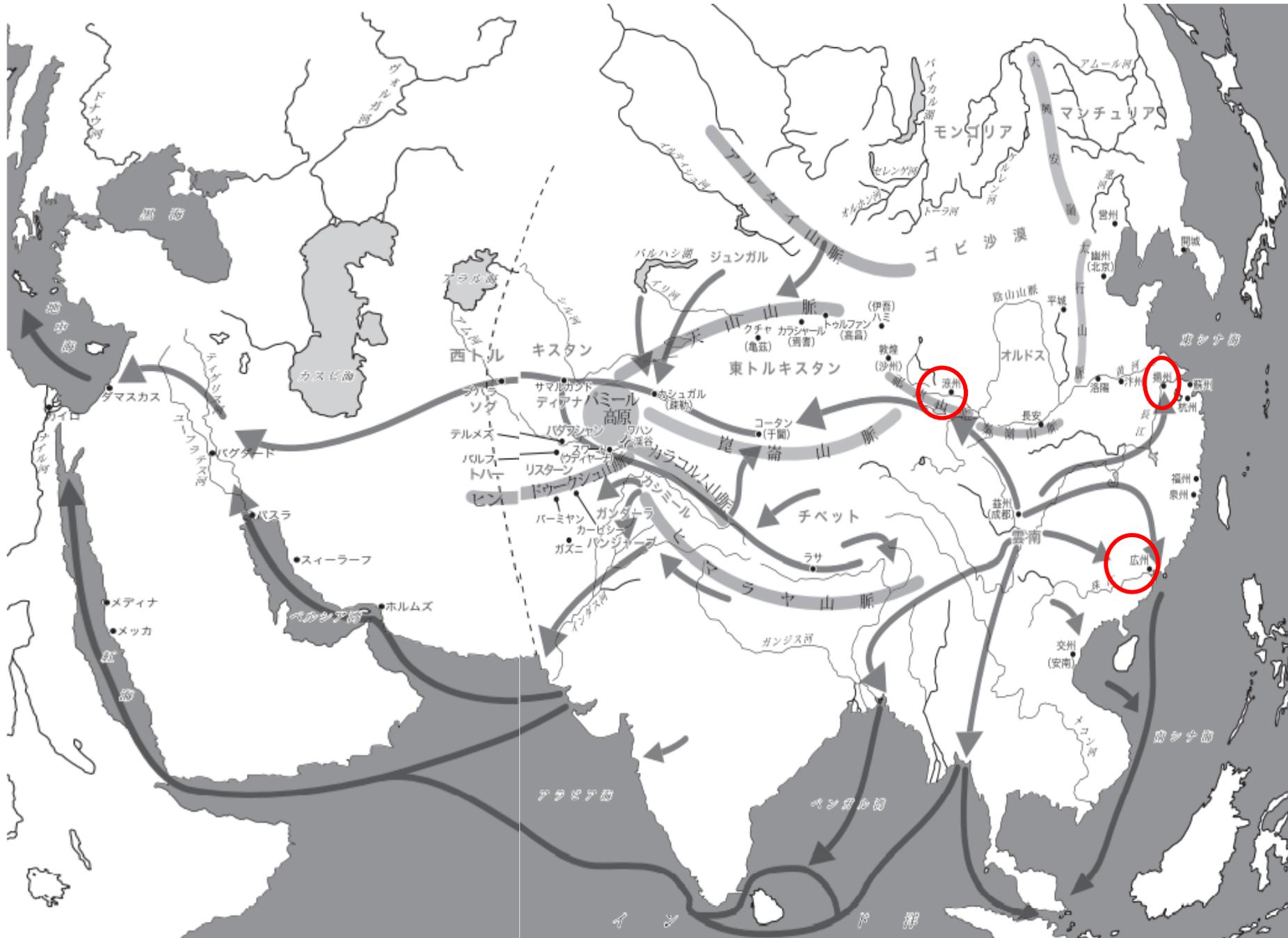
4. **青木香** 1両(40g) 16~14文

中国の中・南部、日本などに見られるウマノスズクサの根を乾燥させた生薬。鎮痛・消炎・解毒のほか、薫香料として用いられる

5. **甘松香** 1両(40g) 16~14文

ネパール、チベット、中国南部にかけてのヒマラヤの高山帯に分布するオミナエシ科の植物。頭痛や腹痛に効く生薬

6. **硃砂** 1両(40g) 9~7文



南海交易におけるソグド・ペルシア・アラブ商人の協業体制 Collaborative System of Sogd-Persian-Arab traders in the Maritime Trade

- ソグディアナ以南へのソグド人の進出

cf. ドゥ=ラ=ヴェシエール2020

トハーリスターン、ガンダーラ、インドへの移住

⇒ **インド系ソグド人**（康僧会・米准那cwn'kkなど）の存在

商人やインド諸国王の側近官（パッラヴァ朝の将軍）などの例

- ペルシア系・アラブ系のシーラーフ商人とソグド商人の提携

法隆寺伝来の香木に刻されたペルシア人名とソグド語の焼印

「貫(銅銭1000枚)」を意味するアラビア語のfakkujはソグド語由来

→ アラブ商人の中国での交易活動が、ソグド商人に依存していたことを示唆

(6) 境域地帯の宗教事情と中華世界の再編 Religious Conditions in the Border Zone and the Reformation of the Cinic World

- 境域地帯各地の宗教事情
 - ソグディアナ……ゾロアスター教の地方的変種（祆教）
 - トハーリスターン、西北インド（ガンダーラ周辺 [罽賓] ）
 - ……**仏教**および景教（東方シリア教会）・マニ教・祆教など
- 「**罽賓**」周辺の仏僧と商人による仏教の中国伝播（3~8世紀）
⇒ 唐代までの中国仏教を創造
- 唐帝国の仏教統制 ⇒ 仏教寺院・僧侶の国家管理と整理
「僧籍」の作成
→ ソグド商人による積極的な仏教改宗
仏僧とソグド商人による協働を促進
⇒ 中華世界がインドに替わり仏教圏の中心となる

ユーラシア東・西の帝国形成と「初期グローバル化」の萌芽

- 中華世界への「西アジア・インド文化（胡風文化）」の浸透は、政治・経済関係の進展とともに、既にユーラシア東西境域地帯を通じて漢帝国の「西域支配」以来、進展
 - ⇒突厥帝国や唐帝国の西方拡大は、そうした長期にわたるユーラシア東部の「西方化」の動きの上に展開
 - ⇒7・8世紀のアラブ・イスラーム帝国の形成とムスリム交易ネットワークの陸・海上の広がり
- モンゴルの西方進出は、突厥帝国・唐帝国の西方拡大を継承・発展
 - ⇒モンゴル帝国時代の「初期グローバル化」を促進
- ※モンゴル帝国時代を「初期グローバル化」に位置付ける考え方

cf. 秋田茂「一九世紀「パクス・ブリタニカ」の世界」同編『グローバル化の世界史』ミネルヴァ書房, 2019.

ユーラシア東部・西部における帝国形成は、「初期グローバル化」を準備した前段階の動きか？